

華子さんを支える職員集団のそだち

ステップ広場ガル 坂本 彩

華子さん：1974年生まれ・女性

更生相談所判定5歳6ヶ月

～レポート作成にあたって～

このレポートの中には華子さんがやってしまった困った行動の描写が出てきます。これをレポートとしてまとめることは華子さんや華子さんのご両親にとっては心地いいことではありません。しかし、あえてまとめさせてもらったのは、華子さんのがんばってきた道を残しておきたかったからです。私たち職員は集団として援助をし、入れ替わったり退職したりします。私だって明日、交通事故でいなくなるかもしれない。そのときに華子さんががんばってきたことを伝えるものが何か残っていなかったら、せっかくがんばった華子さんがまたしんどい思いをするかもしれない。さらに、彼女と同じような障害をもち悩んでいる人がきっとたくさんいると思います。このレポートを通して伝わるであろうがんばって生きている華子さんの姿が、今、苦しんでいる同じような障害をもつ人やその人を支える家族や職員にとって、ひとつのつかえ棒になってくれるかもしれない。そういった思いをご家族にわかっていただき、レポートを書くことを了承していただきました。

①出会い

初めて華子さんに会ったとき、彼女は籐製のかわいい洗濯籠を持って、「これ、お洗濯に出します。」と職員のところを持って行っていた。そして、ご飯を食べ終わると食器をリビングのキッチンで洗っていた。わざわざ洗わなくても、ここは入所施設だからカートに乗せておけば厨房の職員さんが洗ってくれるのだけれど、自分でするのはいいことだと思ったので、「えらいね。」と声をかけて洗ってもらっていた。

細い体で目のクリクリしたかわいらしい人。

「なんで、施設に入ったのかな？手がかからな

そう。」と思うような印象だった。そんなことを言う私に対してそばにいた華子さんの担当女性職員が「彼女はまだまだ自分を出せてないと思うわ。」と言っていたのを憶えている。

施設で暮らすようになって1ヶ月が過ぎたころ、多目的ホールでスクリーンに映画を上映し、みんなで映画鑑賞会をしていたとき、華子さんがトコトコとスクリーンの前に歩み出て、とある男性職員を上目遣いに見ながら、そのスクリーンに手をかけた。引っ張ってははずそうとしたように見えた。しかし、その視線は男性職員をじいーっと見ていた。「なにしてんの～」と軽く関わることでそのときは収まったが思えばこれが「始まり」だった。

このスクリーンの一件を前述の女性職員に伝えたとき、彼女は「問題行動が出てきたのは、困ることやけど、私は、彼女が本当の自分を出せたようでうれしい。」と言った。私は「なるほど、そっか、そういう風に見るのか。この人はすごいな。」と思い、新人の私は「いつか私もこんな風に問題行動を悪いとだけ捉えるのではなく、心広く受け止められるようになろう。」と思った。

しかし、華子さんの問題行動の始まりを「うれしい。」といったこの女性職員も1年後には「もう、無理かもしれない。」とこぼすようになっていく。

②困った行動

職員が耐えられなくなってしまった華子さんの問題行動は「男性職員への執着」と「物を壊す」「それに伴うパニック」だった。「男性職員への執着」の方は「その男性を気にすることをやめることができない。」と言った感じのもの。その職員が出勤するとスイッチが入ったように、その職員の後をついて回ってしまいやめられない。「休みの日なにしてたん？」「今日なにすんの？」と職員が答えても答えても大きな声で連呼すしてしまう。しだいに「もう、言うたやろ。」

という「なに言うたん？」とず〜っと後ろをついて周り離れられない。職員室に入って中から鍵をかけると「開けてよ〜！」と大声で叫び、窓ガラスをガンガン！ドアをガタガタ！それでも反応しないと、廊下を通りかかったほかの入居者の髪の毛を引っ張ってしまい、「やめて〜！」という入居者の叫び声でその場は大混乱。彼は職員室から飛び出さざるを得なくなる…。

それが、その男性職員が休みの日にはころっと収まりおとなしくしているもんだから、しだいにその「こだわられた男性職員」は孤立していくことになる。「僕が出勤しないほうが良いんじゃないかと思ってしまう。」ともらしていた。周りの職員は「そんなことないですよ」といいながらも現実的に、その男性職員が休みの日には一人でケアできるその棟が男性職員の出勤に合わせて、2名体制になり、華子さんにマンツーマンでつく職員が必要になる。人員不足をお互い承知でこういった事態が続くと「ケアの仕方が悪いからそういうことになるんじゃないの？」なんて声まで出てきて、どんどんその職員を孤独にさせていった。

また、「物壊し」の方も激しい。こだわっている男性職員と担当の女性職員、それにいつも華子さんをしかる立場にある主任と厨房の職員が主な対象で、その職員の車を傷つけてしまう。

この車を傷つける行動はガルに入所してから激しくなったという。それまでも車を気にはしていたが壊すまでにはいたらなかったようで、入所施設へきたことの大きな環境の変化や職員の対応など、何らかのストレスが彼女にかかって、この行動を激しくさせていたのかもしれない。

③真っ暗なトンネル

なんだか、ケース会議も開かれたが、働きかけの糸口さえ見つかからないのが現実で、華子さ

んが問題行動を起こすたびに、「ちゃんと見てないからや！」と担当ばかりが責められ、うろろ歩き回る華子さんの後をついて回る…。当時は、これ以上車を傷つけられないためには見張るしかない、と一瞬たりとも彼女から目が離せない、というような結論ばかりが話し合われた。

さらに、このように職員が集団としてまとまりを持たずに援助して行く中で、1人で解決の道を見つけれない職員が、華子さんに体罰を与えてしまうということが起こってしまい、華子さんにも家族にも非常につらい思いをさせてしまうという事件が起こった。

「このままではいけない」「個人の責任ではない、みんなで考えなければ」と囑託医師も入りケース会議をもち、一步踏み出そうとするのだが、アプローチする前にトラブルが起こり、職員は彼女を叱るしかなくなる…。

外部機関に相談に行くと、「職員の対応が悪いからこういうことになる。」といわれて職員はよけいに落ち込む。

彼女が学生時代に関わった人たちに会いに行く、「華子さんは人の痛みがわかりますか？」と質問すると、「わからないと思います。」といわれ、「人の痛みがわからない人に“そんなんしたら〇〇さんが悲しいでしょう”といっても無駄なの？本当にそうなのかな？あちこち回ってはショックを受けて帰ってくる日々。

その中で問題点は職員間で一致するのだが、「だからどうしたらいいの？」が見えてこず、華子さんにとっても職員にとっても真っ暗なトンネルの中にいるような数年が過ぎることになった。

④とっかかりを見つける

暗闇の数年が過ぎ、新しく担当になった女性職員が「これらの行動の原因は何なのか？を探ろう！」と徹底して担当職員集団（4人）で華子さんの行動の理由（ワケ）を考えた。「こうかな？」「ああかな？」と考える中で、囑託の医師

から「ADHD という事情があるかもしれない。」という意見が出された。

「ADHD」という意見を聞いて「そうだ！」と思ったわけではなかったが、「衝動をコントロールできない。」という特徴はまさに華子さんの行動そのものだったので、「そうなのかな？」と疑問を半分持ちつつも「ADHD についてまず勉強する。」「ADHD かもしれない、という視点をもちつつ、華子さんの援助に当たる。」ということ徹底した。まず、4人の職員間で参考になる ADHD の本やプリントを読み、学習会を持ち勉強した。そこで障害の特性を学んだ後、華子さんの行動を「ADHD という視点から見てどうか。」という4人が共通した視点で彼女を見て、記録をとるようになった。半年ほど、記録をとり続け、ケース会議を持った中で「やっぱり彼女には ADHD という事情があるのではないか。」という結論になった。

そして、そのことをお母さんにそのことを伝える日が来た。お母さんにわかってもらえるか、娘が27歳にもなってから突然新たな障害名を言われても、お母さんとしては納得できないのではないか、職員は心配しながら懇談会に臨んだ。

懇談会が始まると職員は最初、華子さんの「いい面」、「変わってきたところ」、などをお母さんに話した後、口火を切った。「いい面もいっぱいある。でも、まだまだわからないところもある。今まで、華子さんがどうしてああいっただ行動をとるのか、お母さんも職員もみんな考えてきたけどわからなかった。例えば自閉症の人なら、自閉症はこういった事情がある、そのために、パニックになる、だからこういうアプローチをするんだ。というのがあります。でも、華子さんにはない、何がああいっただ行動につながるのかわからなくて、お母さんもずいぶん悩まれたと思います。私たちも悩みました。それで、ひとつ、もしかしたらこれかも知れない、というのを囑託医の先生のアドバイスをいただいて見

つけたんです…。」そうやって ADHD のことが書かれた本やブックレットやプリントを5～6冊、ドンと机の上においた。

そのときその場に同席していた私は、その女性職員の言葉に「そっかー！」と目からウロコを落としていた。その「原因を探る意味。」の説明にだ。自閉症だとか、ADHD だとか、そういった名前はその人にラベルを貼るためにつけるのではない。当たり前なことだけど、そのことでどうしたら良いかがわかる。病気もそう、何の病気がわからないと治療法はわからない。物事はなんでも、原因がわからないと、どうしたら良いかはわからないし、原因を探るのはどうしたら良いかを知るためにあるんだ、という至極当たり前のことに改めて気づかされた。「この人は自閉症だからパニックしてもしようがない。」「この人はダウン症だからスローでもしようがない。」「この人は ADHD だから衝動的でもしようがない。」と言って周りの人間が納得するためにはなく、「だからどうアプローチしたら良いのか？」そのために原因を考えるんだ！ということに。

お母さんは興味深そうにその本をぺらぺらとめくり始めた。でも、すぐ読めるものじゃなかった。「どうぞもって帰ってください、ゆっくり読んでもらって感想を聞かせてください。」と言った。

そして、1週間後、お母さんは本をもってやってきた。「この本を、華子の昔の先生に読ませたい！華子がこだわるのは育て方が悪いとか、お父さんの愛情不足やとか、主人のせいになされたりして…！そうじゃなかった、原因があったんです！」と言いながら。本を読んでお母さんも納得した面がとても多くあったのだと思う。「ああ、これで、ここを足がかりに何かが見えてくるのではないか、と思うことができた。

⑤ひとつめの糸口

そこから ADHD に対して良いといわれるア

アプローチを職員で取り組み始めた。「情報を整理して伝える。」「見通しを持てるように働きかける。」「聴覚過敏に対する対応。」(当時は放送がなただけでパニックを起こす日もあった。)

「自分が今何をしているのか、どう思っているのか、自分に対する言葉(内言)をもって少し考えることができるように、“華子さんはどう思うの?”と問う。」など…。また、お母さんには毎週のように本や資料を渡した。お母さんもそれを読み、感想を職員に伝えてくれる。その中で言葉かけの仕方ひとつ、対応の仕方一つを考えながら工夫していってくれていた。27年間いっしょに暮らしてきて、対応を変えることは簡単なことではないと思うが、お母さん自身、今まで散々周りから否定的なことを言われ、時には親の育て方が悪いからとまで言われて、苦勞してこられた中でアプローチの糸口が見えたことはひと筋の光だったのかもしれない。

さらに、職員間でもお母さんとも何度か話し合いを重ねながら納得してもらった上で投薬も開始した。投薬開始時に職員間で確認したことは、「投薬が解決ではない。薬で彼女が楽になって、そこにどんな働きかけができるかが大切。それをしないのなら飲ませないほうがいい。」ということだった。

取り組みを始めて、一定の成果は見え始めた。「見通しの持ちやすさ」「情報を整理して伝える。」「区切りをつける」なかで、外にふらふら出て行くことはなくなり、マンツーマンでつく必要は減っていった。自分なりに予定を立てたら、それにしがたって落ち着いて過ごす日も出てきた。(というか、自分で予定を立てたらその予定通りに動かないと気がすまない、1分1秒でもずれたらパニックになる、といった感じでもあった。)

が、やはり、大崩れの日にはものすごい、こたわったり、泣いたり、わめいたり、仲間を叩いたり、自閉症の入居者に禁忌語を連発したり…。減ったとはいえ落ち着くことができない日の彼

女の周辺の騒がしさはあまり変わらなかった。

その中で見えてきたことがあった。それはしてしまったことに対する本人の反応の変化、だった。それまでは、「悪いことした。」となんとなくはわかっているもののことの大きさをわかっていないというか、別のこととして捉えているかのような、なにか、自分との関係が“希薄”な印象だった。だから自分がしたと認めるもの簡単で、形だけ「ごめんなさい。」ということもできた。

しかし、そのころからやったことを認めたくない、涙を浮かべて「私、知らんもん!」とあって頑として認めない姿も見えるようになった。素直に認めないというのは悪い姿かもしれないが、私たちは「自分のしでかしたことの大きさがわかり、認めたくないのでは?」「自分を見ることができるようになってきているのでは?」と感じた。と、同時にやってしまったことの重大さがわかるだけに落ち込みも激しい。(自己肯定感がもてない) 継続して調子のいい日が続くわけではなかったので、何か取り組みを始めたくても、調子の悪い日の大きなパニックに本人も回りも翻弄される。少しいい感じかと思ったら、次の日には大暴れ。やってしまったことがわかる分、「こんなことしたくなかったのに〜!」と後から大泣きする日もあった。

そのころ、「やりたくないことをしてしまう自分」ということがこれほどつらいものなのかと思った出来事があった。

ある日、パニックを起こしてしまい、自分の部屋の物を大暴れして放り投げ壊してしまった華子さんは、泥棒が入ったかのようなすさまじい部屋の中で大声をあげて泣きながら座り込んでいた。そして、「こんな私、死んだらいいんや〜!お母さんとお父さんと妹で楽しく暮らすんやろ!わたしなんかいらんのや〜!」とタオルを自分の首に巻いて絞めようとした。その姿は「こんなことしたくない。」「私はこんなことを

する人間でいたくない。」「またやってしまった。」「したくないのにしてしまう。」「もう嫌だ。」という華子さんの心の叫びだったように思う。

「わかりかけた時のしんどさ」、自分を見つめることができるようになった分、自分の「ダメさ」「できなさ」が強烈に見えてくる。それを受け入れることは本当に苦しい作業である。しかし、彼女の中に「自分」が生まれ始めている。がんばってここまで来た彼女を「悪い自分がわかった。」なんていう中途半端なところでほっておくわけにはいかない。あなたには、「よい自分」も「がんばる自分」も「もっと他の自分」もあるんだ。

職員はADHDという働きかけの糸口はみつけたのだけれども、「これだけではない。」「何か足りない。」「何かをかけている」「良い変化の兆しは見えるけれども…？」といった感じであった。そして、「次」に行き詰った。

「ここからどう働きかけたらいいいんだろう？」

◎施設の外に何かが待っている？

「24時間ガルにいるからあかんのちゃうかな？昼間どこか通う場所があれば…。」根拠はなかったがそんな気がして、もう少し、彼女の世界が広がれば何かが変わる気がして、障害者地域生活支援センターに電話した。センターのコーディネーターさんからもらったアドバイスは「一度彼女の全体像を確認してみて、どうしたらいいか考えたらどうかな？そのために、発達相談を受けてみたらどうかな？」と言ったものだった。

「ああ、そういう方法があるのか、入所施設にいると何も利用できないと思っていただけ…。そうだな、何かが見えてくるのかもしれない。」と思った。

そして、二人でやまびこ支援センターを訪ねた。

相談場面では正直驚いた。発達相談員の先生は「お話のできる人にはできるだけたくさんインタビューをします。」ということで、華子さんにさまざまなことを聞いていた。「生年月日は？」「家族は？」ということから始まり、「ガルが好きですか？」「これから先、どこで暮らしたいですか？」「夢はありますか？」……。それらの質問に実にまじめに丁寧に彼女は答えていく。一生懸命考える。「ガルにきたいきさつ」を聞かれ、

「最初は迷ったけど、ガルが似合ってるかな。」

と答えている姿を見て、「そうやんなあ、なんで家を出なあかんのか、施設で暮らさなあかんのか、わからへんかったやろうなあ。しんどかったやろうなあ。」と施設で暮らさなければならぬ現実を受け入れるまでの彼女の葛藤を想像して、知的障害を持ちながらも一生懸命にその事実を受け入れ、それを乗り越えてきた彼女に対して「この人やっばりすごい人やなあ。」と思った。

今から思えば、本人の中に「どうして施設で暮らさなければならないのか」が、納得できないままガルに来て、自分の中でどう整理をつけていいのかわからない思いが入所当初激しい問題行動として出てきていたのかもしれない。私たちは、「入所してきた人」を今までの暮らしから切り離して「ここにいる人」という存在で見ている。しかし、あのころ、彼女たちの気持ちはまだまだガルには存在していなかったのだと気がついた。

私たちは華子さんのことを「みくびっていて」かつ「できると思い込んでいた。」過小評価・過大評価、両方違う方向にしていたのではないか？彼女を自分の暮らしや将来の夢をもつ「ひとりの大人の女性」として見ようとはせず、「みくびっていて」反面、「それだけ上手に喋れるんやから、こっちの言うことくらい理解してるハズ。なのにちゃんとしないのは、わざと悪いことしてるんや。」と彼女にとっては難しいことを

要求し、彼女の“できなさ”を見ようとしていなかったということを感じた。

相談の結果、いくつかのアドバイスをもらった。そのなかで、「変わっていく自分を意識できるような」「来し方行く末を彼女が実感できるような」働きかけを、さらに、「自分の感情を言語化できることは自分をコントロールできるようになる第1歩。今はコントロールしたいときに材料がない。その材料を。」とアドバイスをもらった。

それを持ち帰り職員間で話しながら考えたのだが、例えばそのころ、彼女は自分が良い行いをしたときに「華子、えらい？」と職員に聞いてくる姿がよく見られてきていた。そういったときにも

「華子、えらい？」

⇒「自分でどう思う？」

⇒「う～ん。」

⇒「去年ってどうやったっけ？」「去年と比べて～が違うよね。」

といった風に、彼女が自分で考える間や材料を入れるようにし、自分で、「良い自分」と「悪い自分」だけでなく、「変わっていく自分」を感じていけるような働きかけをしていこうということになった。

「去年の華子さんだったら、こんなときしんどくて暴れてしまっていたけど、今の華子さんはがんばってできているね。」と。

その働きかけは少しずつ、彼女の心の中に積もっていったように思う。半年を過ぎたころ、気がついたときには大きなパニックはほとんどなく、とても「素」の彼女の姿が見える毎日を過ごし始めていた。

⑦自分の居場所がいくつかある、

安心できる場で自分と向き合う。

今年になって、私も彼女の担当から離れ、事

務所で勤務することになった。それは、華子さんにとっては、自分の生活する棟以外にも、自分を知っている人がいて、安心して過ごせる場所が1ヶ所増えたことになったようだった。そういえば華子さんは「人に対するこだわり」が問題だったのに、担当棟だけで抱え込んでいたな、と気がついた。棟でなんとなく職員と関係が煮詰まったとき、仲間とけんかしたとき、ふっと逃げてくる「暖かいおばあちゃんの部屋」的なものが彼女にはなかったな、と思った。今は事務所がそんな存在になっているように思う。

事務所の一角に机といすを置き、施設の封筒に「郵便料金別納」のハンコを押してもらった仕事を彼女にお願いした。4月当初は、毎日カチカチこだわった時間に事務所に来ていたが徐々にその「カチカチ感」もなくなり、穏やかにゆっくりとした時間をすごしている。最初は私が席をはすすと「どこ行くの？」「私も行く！」といった様子も見られたのだが、そのうち、「事務長さんがいるし、大丈夫ちゃう？」と言うと、「うん、大丈夫。」といいながらもくもくとハンコを押し、1000枚入りの段ボール箱の中の封筒の印押しを一人で仕上げてしまっていた。「午前中は事務所、午後は作業棟で仕事をします～」と自分なりに予定を考えている、何かの都合で予定が変更になったときも、最初はパッと顔色が曇るのだが、数秒考えて、「ウンわかった！午前中作業棟に行くわ！」などと臨機応変に予定を変更できるようにもなった。

自分の中で自分と喋り考えて納得をしようとしている姿も見えてきた。いつもなら、刺激の多さ、気になる人の多さから大荒れしていた施設の一大行事、「コスモス祭」で、今年は若干パニックを起こしかけるものの、自分で持ち直せていた。パニックになりかけると、両耳を押さえて音を聞こえないようにしながら、「これは本当の華子じゃない。」とつぶやいて我慢している。そして立ち直る。

そういえば発達相談の先生に「パニックにな

る。手が出るというのは、我を忘れる行動ですよ。忘れてはならない我を取り戻せるといいのにね。」とアドバイスをもらっていた。

「我を忘れて殴る」とは気持ちを言語化できないから起こってしまう。「彼女が自分の気持ちを自分の中で話す言葉を持てるように。」との言葉も思い出した。

今の彼女がパッと反応しそうな場面でも、数秒、間をおいて考えられる、この数秒の大切さ、意味の深さを実感している。

そして、その数秒の隙間に私たちの言葉が彼女の心に届くようになったことを感じる。以前は、どんな言葉をかけてもその声は彼女の耳に届いていないかのようにだった。「そんなしたらあかんよ。」も「大丈夫、ちょっと失敗しただけや、やり直せるよ。」も、彼女の困った行動のブレーキにはならなかった。でも、今は、確実に届いてるのがわかる。私たちの言葉を心に一回止めて、「私はどうしたらいいかな？」と考えているのがわかる。

◎職員集団がよりどころをもつ

問題行動の派手な人の援助を考えると、そのことに振り回されていないつもりでも、やっぱり振り回されていることが多い。特に華子さんの「困った行動」は職員を孤立させてしまう傾向のある行動だった。

こだわっている男性入居者の姿を追いかけて、冬の寒空の中、何時間もその職員の車の横から離れようとしないうる華子さんの側に立って、ただひたすら「帰ろうよ。」「イヤ!」「あっち行って!」を繰り返す。いろんな説得を試みる。「ご飯だよ」「おなかすいたね」「ご飯だけ食べてまた戻ってきたら?」「お風呂はいろいろよ。」「寒いね。」「今日は楽しみにしてたテレビがあるよ。」…、すべて「イヤ!」手を尽くした感になってしまい、ポケーっと側に立っているだけの数時間…。「棟に戻って食事介助に入らないといけない時間なのに。」「私はここで、華子さんを連れ

ても戻れないで、ポーっと立ってるだけ…。」「食事は人が足りなくて困ってるのだろな。」「かといって引きずって連れて帰るわけには行かない。そんなことしたら体罰になってしまう。」「どうしたらいいんだろう?」そんなことを繰り返していると、お互いわかっているつもりでも職員もなかなかコミュニケーションが取れなくなってくる。「なんでこんなに困ってるのに助けに来てくれへんのやろ?」「なんで、こんな忙しいのに、連れて戻ってきてくれへんのやろ?」職員、家族など華子さんを取り巻く人々が「何とかしなければ」「どうしたらいいの」と思いながらも、孤独になっていってしまった。(実際こういった場面で無理に連れ戻ってしまい、華子さんが体に擦り傷を負う事もたびたびあった。)

華子さんの今までを振り返ってみて、「ADHDではないか?」といった糸口をつかんだことは大きな転機になっている。しかし、それは、華子さんが ADHD だったから、ADHD に対する対応をしたから良くなったというだけのことではないように思う。「ADHD という視点で6ヶ月記録をとってみよう!」といった ADHD という糸口が職員集団が同じ方向を見つめるきっかけになったこともとても大きいと思う。

そして発達相談を受けたこと。それまでも、ガルでは「個別援助計画」を毎年作成していた。その中で、「ねらい」「なぜそのねらいにするのか」「具体的なアプローチは?」の3段階にわけて、「生活の様子」「集団とのかかわり」「健康面」を考えていく。ADHD に対する取り組みを始めたころ、華子さんの援助計画をたてようと思ったときに、私はハタと止まってしまった。ADHD はわかった。「情報を整理して伝えることが大切なんや。」それはわかっている、あれ?でも、何を整理して伝えるの?「見通しを持ちやすく。」うん、それもわかる、で、どこへ向かって見通しを持ってもらうの?そういったことが浮かんでこなかった。いままで、彼女のパニックの激しさに振り回されて、「パニックをやめさ

せる」ことに一生懸命で、「パニックを取り除いた華子さん」に対して、何をねらいにしてどう働きかけたら良いのか、と言ったことはまったくといって良いほど考えてこなかったと思った。

2つのアドバイスをきっかけにバラバラに切り離されていた職員がつながった時、職員が集団として横のつながりを持ち、援助をしていけるようになったことで、表面的に「問題行動をなくそう」といった個別援助計画ではなく、「華子さんはどんな人」「華子さんには何が必要なの？」「華子さんはどうなっていきたいの？」という本当の意味での個別援助計画を考えていけるようになったのである。華子さんのしでかしてしまう大きな行動をやめさせることのみ終始してしまっていた職員が、彼女が持っている力や、もってない力や持とうとして芽が出始めてる力や…、そういったものに目を向けられるようになった。

その入り口は「ADHD ではないか」というアドバイスであったり発達相談であったりしたが、出口はそのアドバイスを職員が集団で受け止め、集団で考え華子さんへの実践に落とし込んでいけたかどうか、ということにあったように思う。

⑨まとめにかえて

先日、ダスキンさんがモップの交換に来たとき、華子さんは張り切って全館放送をかけた。「みなさーん、ダスキンさんが来られたのでモップを交換します。玄関まで持ってきてくださいーい。」

もともと、バスガイドになるのが夢の華子さんである、放送をするのは大好き。みんなに「ようわかったわ。」と褒められて満足げだった。しかし、である。その放送を聞いてビックリしてパニックになってしまった入居者が他の棟にいた。華子さんの声は少し甲高いので、反応してしまう人がいるのだ。担当の職員から「あの放送、やめてもらえへんかなあ？」といわれ、私は華子さんになんて伝えようか悩んだ。反応し

てしまう入居者はつい一昨日パニックを起こし、ガラスを割って大怪我をしたところで、これ以上パニックを誘発するようなことは避けたかった。しかし、放送をしている華子さんはとても誇らしげで、みんなに褒められ、喜んでいて、「放送やめて」といったらものすごく落ち込むだろうと思った。そこで、私は華子さんに手紙を書いた。

「事務所の皆さんと華子さんへ。

ダスキンさんが来たとき、

放送をするとOさんがビックリしてパニックになるので、

放送はやめて電話で教えてください。

よろしくお願いします。C棟

と書いて、丁寧に封筒にいれ「OO華子様」と宛名も書き、華子さんの机の上においておいた。帰って来て華子さんはそれを読んだ。何度も内容を確認した後、偶然現れたOさんの担当職員に「手紙ありがとう。今度から放送やめるわ。」と言った。そして笑いながらこう続けた。「この手紙読んだときな、私、どう思ったと思う？ “あー、私も昔、放送が嫌いやったな～” って思って。フッフ。O君がビックリしてしまうの、わかるわ～。」

事務所にいた職員はいっせいに腰が砕けたようになって、大笑いした。「そやったな。耳押さえて泣いてたな。もう、今は大丈夫やもんなア。華子ちゃん、変わったなあ。」

そこには顔を手で覆いながら照れ笑いをする華子さんの姿があった。

⑩これから

華子さんにとって、これから大切なのは、「来し方行く末」の「行く末」である。過去の自分を振り返って、「私は変わってきた」ということが実感できるようになってきた華子さんであるが、「行く末」はまだ、ぼんやりしているのだと思う。「これからどうなりたい」がなければ、またつまづいてしまうだろう。

先日、華子さんが頼りにしていた職員が青年海外協力隊に行ってしまった。1～2週間は変化がなかった華子さんだが徐々に、動きが少なくなり、覇気がなくなり、どちらかというとし、ふさぎこんだような様子になっていった。

「こういうときにどう援助していったらいいんだろう？」職員同士で話し合ったときに、だからともなく「周りの人ばかりが気になってきた彼女がもう少し、自分自身を見れるような何かはないだろうか。」という意見が出た。

彼女は「母親⇄自分」「職員⇄自分」という世界ですっと生きてきたような印象がある。そうではなく、自分を中心に、自分自身のことに集中できる「なにか」。華子さんがドキドキしながら、手に汗握りながら自分で進んでいける「なにか」。これから、そういった「なにか」を見つけて行けたらいいのではないか。それが、彼女の「行く末」につながるのではないだろうか。

「行く末」の見通しを作って行くのは職員や彼女を支える周りの人間の仕事である。華子さんが「ああいう風になりたいな」と夢を持ち、そこへ向かってがんばっていけるような「未来」を一緒に見つけて、一緒に階段を上って行けるようにしていきたい。

今の障害者福祉の流れを考えたとき、「未来」を夢見ることは非常に難しい、そこには厳しい現実が待っているといわざるを得ない。しかし、だからと言って、ここまでがんばってきた華子さんを宙ぶらりんにさせるわけにはいかない。

私たち職員の仕事は「目の前にいる入居者」の「ここにいる時間の暮らし」だけを支えたらいいと言うものではない、と言うことを華子さんは教えてくれていると思う。

彼女の担当職員にさせてもらって、何より私がものすごい影響を彼女から受けた。私自身がすごく成長させてもらったと、お世辞でもなん

でもなく本気で思っている。彼女がここに来てくれたことに心から感謝している。

この仕事をする職員はみんな、さまざまな形で入居者に支えられている。

今、華子さんの未来が厳しいと言うのなら明るい未来に変えてやる、私らが社会をひっくり返してでも、新しい未来を作るんや、というくらいの気概をもって、明日からもみんなと一緒にがんばりたい。

華子さんの未来は私たちみんなの未来なんだ。